



TITLE:

漢字と情報 No.15

AUTHOR(S):

CITATION:

漢字と情報 No.15. 漢字と情報 2007, 15: 1-8

ISSUE DATE:

2007-10-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71792>

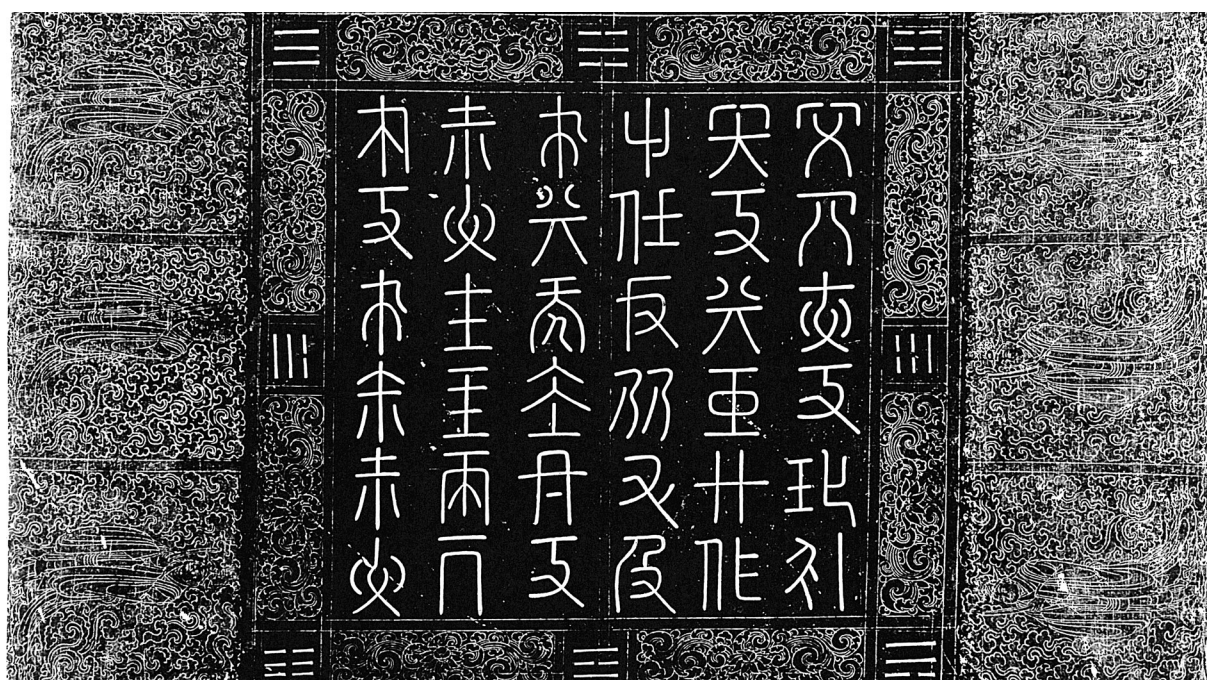
RIGHT:

漢字と情報

No. 15
2007・10



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 柳田国男の藤枝晃宛ハガキ
- 全国漢籍データベースの典拠情報について
- 人文研の英知を OPEN に
- 人文研アーカイブス(15)道宗皇帝哀冊・蓋(契丹小字)拓本

柳田国男の藤枝晃宛ハガキ —「人文研探検」覚書—

菊地 暁

人文研に入所してもう随分経つが、ここが不思議な場所であることに変化はない。内から見てもよく分からないのだから、外から見ればなおさら分からないことだろう。

だとすれば、ここは「探検」に値するのではないだろうか。いや、そうに違いない。あたかも今年度は所屋の本部構内移転が予定され、この場所が八十年近くの歴史の中で溜め込んだウズウムゾウが移動あるいは廃棄されようとしている。その来歴を今一度確かめておくこともあながち無意味ではあるまい。そんなわけで、人文研にまつわるヒトやモノや作品について共同研究することとあいなった。題して「人文研探検」。

実際の活動内容はきわめて地味、そして地道だ。この場所に残された文書やモノを整理し、来し方を知る方々からお話をうかがい、歴代スタッフの著作を読み直すなど、さまざまなレベルから人文

研の知の蓄積にアプローチする作業を一步一步進めている。

そんななか、意外なモノを発見することが何より嬉しい。たとえば、西館三階のガラクタが雑然と納められた一室から現れた柳田国男のハガキもその一つだ（図1・2）。

昭和二十七年六月二十四日、柳田が成城の自宅近辺から投函したとおぼしきこのハガキは、柳田特注のポートレート入りのもので、「京都市北白川 人文科学研究所之藤枝晃様」に宛てられている。内容は原稿の執筆がはかどらないことの言い訳である（■は判読不能）。

拝啓 自然史学会の編輯には貴君の御平■と存じます。もし他の人であつたら其方へ御伝へ下さい。七月初までの御約束を果すべく、もう半月も前から着手しましたが、雑用が多いのと疲れの為に遅々として進まず又長くなりそうで困つて居ります。今八九枚まで書いてまだ半分も達しません。「人とズズダマ」といふ題で寶貝の話の入口を書きたいと思ふのですが、とても成功ハ望めません。とにかく出来次第御目にかけるつもりです。

六月二十四日 柳田国男

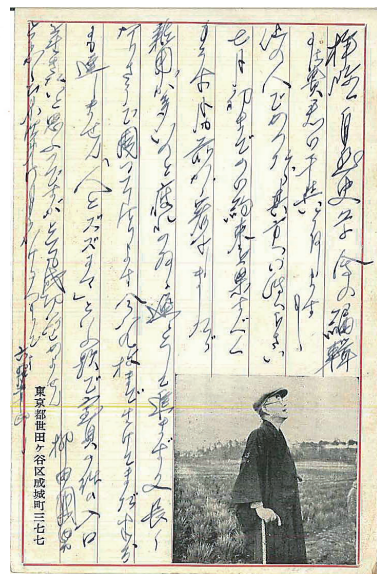
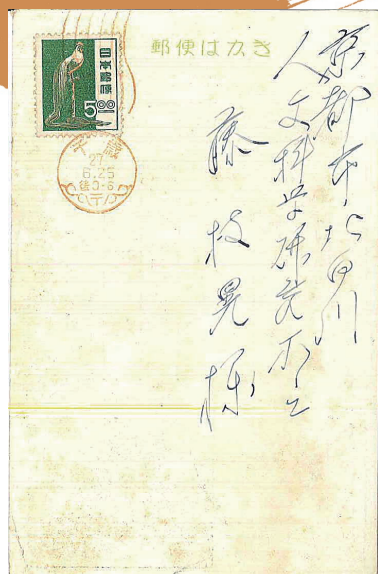


図1・2 柳田国男の藤枝晃宛ハガキ（昭和二十七年六月二十四日）：柳田特注のポートレート入りハガキ。原稿執筆の苦勞が綴られている。

文中の「自然史学会」とは、昭和二十三年設立、名前から想像されるような理系のそれではなく、「自然科学と人文科学との接触領域における具体的研究の促進」を会是に掲げた不思議な学会である。その中心となったのは今西錦司、梅棹忠夫、藤枝晃など、戦時中、中国・張家口に設置された西北研究所のスタッフたち。戦時中の調査・研究の成果を発表の機会もないまま抱えていた学徒たちが、成果を世に問う媒体を持ちたいというのが学会設立の契機だった。その結果、「生物学における類型学的方法」(沼田真：二号)から「水位の変化と中国史」(宮崎市定：三号)まで、ヴァラエティ豊かな論文からなる学会誌『自然と文化』が創刊される。この閥鍋的雑誌は不幸にして三号雑誌に終わるのだが、貧相な紙面に掲載された饒舌な論考からは、カネはないが政治的抑圧もない、戦後の自由でアナーキーな学問状況が感じられる。

一方、柳田国男はというと、文中の「人とズズダマ」は無事『自然と文化』第三号に掲載され、後に遺著『海上の道』(一九六二年)に収録される。周知の通り、晩年の柳田は、寶貝を求めて列島を北上する稲作農耕民の痕跡を幻視し、彼独自の日本民族形成論である「海上の道」論の完成に邁進する。この小論もその一端だ。当時、柳田は三笠宮を迎えた「新嘗研究会」、農学者たちとの共同研究「稲作史研究会」など、さまざまな学際的研究会を組織していた。「民族の自然」ともいうべき「日本人」の正しいあり方を解明するため、文理とりまぜた多角的アプローチが必要とされていたのである。

それゆえ、柳田の『自然と文化』への寄稿は東西二つの「文理融合」の邂逅という側面をもつ。そして興味深いのは、京都の学問に対する柳田の期待がストレートに表明されている点である。「人とズズダマ」の「付記」には、柳田にしては珍しく先行研究がきちんと言及されているのだが、

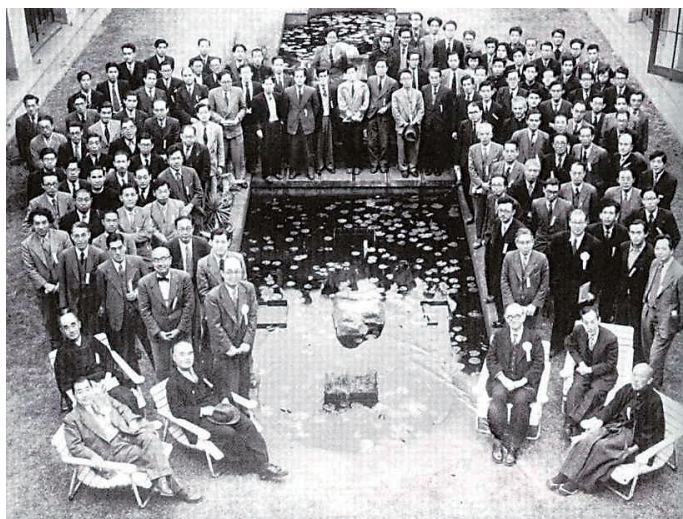


図3 第6回日本人類学会・日本民族学協会連合大会記念写真(昭和二十六年十月二十七日於京都大学人文科学研究所)：画面左下に椅子座する柳田国男の右方に貝塚茂樹が立っている。

「寶貝については、貝塚氏の『中国古代史学の発展』が大きな感化力で、それがこの一文の発足点にもなつて居る」と、貝塚茂樹への惜しめない賛辞が記されている。リップサービスもあるにせよ、およそ柳田らしからぬ持ち上げ方だ。柳田は、自身の企図に必須でありながら自身の周囲の弟子たちには欠けていた「文理融合」の具体的可能性を、遠く京都の学徒たちに見出していたのかもしれない。柳田の藤枝宛ハガキは——単なる原稿の遅れの言い訳に過ぎないが——、そんな戦後の学問の胎動を伝える、ささやかな、だが、確たる一証人なのだ。

人文研にうずたかく積まれたウゾウムゾウには、この手の資料がまだまだ転がっていることだろう。あるいは所外に転出した関係者の周囲からも、何らかの関連資料が現れるかもしれない。そしてそれらは、人文研、京大、京都のみならず、日本の人文科学の来し方行く末を考え直すきっかけにもなるに違いない。

そんなわけで、不審なモノを発見された際にはお近くの「探検班」まで御一報いただければ幸いです。
(人文科学研究所助教)

全国漢籍データベースの 典拠情報について

永田知之

全国漢籍データベース（以下、DB）の新たな試み、「典拠情報」に関しては本誌 No. 14に掲載された「進化する「全国漢籍データベース」」で既に言及されている。小文はこの「典拠情報」の概略についての紹介を目的とする。「典拠情報」を蓄積するきっかけとなったのは本誌 No. 12所載の「漢籍目録と漢籍のあいだ」で大西賢人さんが紹介しておられる「漢籍を見る会」（仮、以下「見る会」）である。まず、順序としてその経緯を述べておく。

そもそも「見る会」は、京都大学人文科学研究所（以下、人文研）の教職員有志が人文研所蔵漢籍の逐冊調査に着手したことから始まる。「逐冊調査」などといえば堅苦しく感じられるかもしれない。だが、実態は文字どおり「漢籍を見る」集まりとあってよい。『東方文化学院京都研究所漢籍目録』（以下、1938年目録）の掲載順に従って、蔵書を点検する。具体的には1938年目録、漢籍基本カード（漢籍が入庫する度に作成。書誌的事項を記入）、現物（漢籍）の三者を見比べる、その繰り返しに尽きる。

「見る会」例会は毎週水曜日の午後、人文研の漢籍書庫内で開かれる。職場の異動によるメンバーの変遷を経て、現在は人文研教員6名で細々とながらも続いている。

1938年目録は四部及び叢書の順に漢籍を排列する。「見る会」の開始から丸三年を経た2006年4月、点検作業は史部編年類の途中まで進んでいた。この頃、「見る」だけでは勿体ないということで、担当を決めて各人が漢籍一点ごとにレジュメを作成、それを参加者全員で検討する形を取り始めた。レジュメ作成の方針は以下のとおり。

1. 1938年目録に見える刊行年や出版者などに関

図1 1938年目録57頁下段

する典拠情報が何に由来するかを示す。

2. 刊行に関わる序文の中で、日付と作者、作者と刊行者の関係、刊行の経緯などが分かる情報を抜き出す。
3. 出版者や序文の作者などの伝記に関係がある資料を紹介する。
4. どのような蔵書印が捺されているか紹介する。

DBで漢籍を検索した際、画面右下部に「典拠情報へ」の文字が表れる場合がある。これをクリックすると、該当の漢籍についてより詳しい情報が表示される。実はその内容こそ「見る会」例会終了後、担当者がレジュメを補訂の上、完成させた定稿をHTML文書化の後、利用者の方々に生かしていただこうと公開したものなのである。

だが、ここに書いたほど、事は簡単に進まない。序跋を始めとした書誌情報を示す文章を読解しあぐねることがある。蔵書印の文字を釈読できず、レジュメに「●」、「■」、「◆」（不詳を示す記号）を並ぶこともしばしばだ。

厄介な事柄は、これだけに止まらない。『皇明從信録』という明刊本を例に挙げたい。1938年目録の当該箇所には「皇明從信録四十卷 明陳建撰 明沈國元續 天啓七年刊本」（図1左から3行目）とある。これ以外は受入番号及び冊数が記されているだけで、他には何の情報も無い。この記述は後続の目録、そしてDBにも踏襲されている。



それでは、目録の元になった基本カード（図2）はどうだろうか。カードには様々な文字が錯綜して見える。ペンで書かれた「陳建」の名前に対して鉛筆で「弘治十年生」と注記されるのは、その一例である。左側には購入元の書肆「來薰閣」の名のスタンプが捺されている。さて最も興味深く思われるのは、刊行年を割り出した手段だ。

結論からいえば、この『皇明從信錄』は書物の中身をいくら子細に見たところで、刊刻時期を知ることではできない。カードの作成者もそのため巻首所収の「從信錄總例」という文章に見える紀年から、一旦は「萬曆庚申（四十八年）序刊本」と記すしか無かったらしい。

しかし、（最初のそれと同一人物かは不明だが）カード作成者は時期の特定をあきらめなかった。「萬曆庚申（四十八年）序」を消して、上から「天啓七年」と記し、更に「兩朝從信錄陳序云刻竣于丁卯春」と注記するのが、その証拠になる。

人文研所蔵『兩朝從信錄』に収める陳懿典の序文に「沈生先有皇明從信錄。自洪永至萬曆。稿創

于辛酉歲。刻竣于丁卯春」とある。「沈生」は『皇明從信錄』の續撰者・沈國元を、「丁卯」は天啓七年を指す。『皇明從信錄』自体に刊行年が無かったため、カードの作成者は他の漢籍にまで調査（捜査？）の範囲を広げて、「（同書の）刊刻は丁卯の春におわる」という記述を見出したわけだ。

こういった鈔刻に関する情報をどこから得たかという記述が基本カードに見られることは、ごくまれだ。作成者は何らかの手段で得られた情報のみをカードに記していく。『皇明從信錄』の場合は別の漢籍より情報を得たので、敢えてメモしたのでだろう。七十年の時を経て色褪せたカードを見ていると、この先人の執念めいた熱意には敬服せざるを得ない。

漢籍からカード、そして目録を作成する過程で多くの情報は削られる。「見る会」の作業はこれを逆にたどって情報を復元していく側面をもつ。カードには時に残る購入先、購入価格、漢籍に捺された印鑑、この種の目録には表れにくい事柄より様々な知見が得られる。

目録の誤りを訂正し、遺漏を補うこともある。「この情報はどこから得たのか?」、こうつぶやく我々、（カードを作成した）先人、そして漢籍による三つ巴の戦いは今日も続く。

色々と議論していて1回2時間の例会で漢籍5点も検討できなかった場合も少なくない。人文研所蔵の漢籍が（景印本・標点本始めなお増加しているわけだが）約30万点、うち2007年11月時点で「典拠情報」を公開した蔵書が300点弱である。史部地理類まで到達したものの、レジユメの作成を始める前に見た経部及び史部冒頭並びに1938年目録未収の書については、記録が備わっていない。

「見る会」の某氏いわく「（DBを検索して「典拠情報」のある漢籍に当たるのは）宝くじに当選するより難しい」。遅々たる歩みだが、まずは「宝くじの一等に当たるのよりは簡単」になることを目指して励みたい。また進捗状況などを本誌でお伝えすることもある。気長に我々の作業を見守って下されば幸いである。（センター助教）

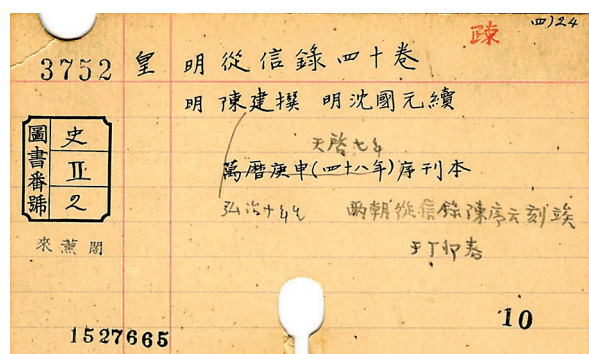


図2 『皇明從信錄』の漢籍基本カード

人文研の英知を OPEN に

武田時昌

日本における電子図書館は、1991年に発足した奈良先端科学技術大学におけるパイロットプロジェクト（「曼陀羅図書館プロジェクト」）に始まる。「居ながら図書館」「24時間図書館」として実際のサービスを開始したのは、1996年4月であった。それに先立つ早期に、筑波大学、神戸大学、慶應大学、京都大学も電子図書館の構築に取り組んだ。

京都大学での事始めは、1994年度附属図書館企画展「吉田松陰とその同志」（9月26日～10月28日）において行った電子展示のデモンストレーションである。電子図書館研究会（代表：長尾真）が開発したアリアドネ（Ariadne）というシステムを用いた。そのシステムの売りは、(1)章や節を単位とする階層的な目次検索、(2)端末装置に機械翻訳、合成音声による自動朗読、メモ記入等の「電子読書機能」を具えているという2点だった。

その後、尊攘堂旧蔵の維新資料画像データベースを完成させ（1995）、国宝に指定された鈴鹿本『今昔物語集』の画像を翻刻文付きでWeb公開した（1996）。そして、1998年1月には、画像データベース化した貴重書を中心とする電子図書館を稼働するに至った。そのキャッチフレーズは「机の上に京都大学」「京都大学エンサイクロペディア」であった。

2002年10月になると、国会図書館が明治期刊行の所蔵図書を近代デジタルライブラリーとして一挙に公開するようになった。ところが、ちょうど同じ時期に、千葉大学では機関リポジトリの構築に最初に着手しはじめていた。リポジトリとはデータやファイルを蓄積する場所を意味する語であり、機関リポジトリとは研究機関とその構成員が教育・研究活動によって生み出した学術成果・知的生産物をデジタル資料の形で蓄積、管理し、Web上での発信を行うための電子アーカイブシ

ステムをいう。

90年代からの電子図書館には、「単館単位で小規模、多くが実験レベルである」「研究者との連携が弱い」といった欠陥があった。その克服に欧米の大学で発進しはじめていた機関リポジトリの構想が浮上し、電子図書館の新たな潮流となった。

京都大学では、2005年度より学術情報リポジトリ検討委員会を設置し、準備サイトを試験公開した（<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/>）。そのロゴマークには、「京大の英知をOPENに！」と記されている。最初に公開されたのは、工学研究科スタッフの学術雑誌掲載論文、数理解析研究所の「講究録」等である。最大の課題は、無料閲覧のオープンアクセスを前提として、京都大学らしい学術情報がどれだけ集積できるかにあった。そこで、文系コンテンツの目玉商品として人文科学研究所の公費刊行物に白羽の矢が立った。

人文科学研究所ではHP上で研究成果の一部を公開し、「東方学報」等の画像データの作成を試みていたが、委員会からの要請を承けて積極的にコンテンツ提供することに踏み切った。その結果、昨年度に1990年以降の「人文学報」「ZINBUN」を、本年度はさらに「東方学報」もあわせてリポジトリに登録することになった。既刊号すべてがPDF化され、著作権の許諾を得た論文はWeb上での閲覧、ダウンロードが可能になるわけだ。電子ジャーナルのオープンアクセス化を大学自らが推進することは、利用者のみならず、学術雑誌の購入費の高騰に悩む図書館にとっても渡りに船といったところだろう。

今後は機関リポジトリ事業が本格化し、各大学に特有の研究者コミュニティが形成されていくはずだ。研究情報がグローバル規模で連結され、一元的に共有する場が創出されるかもしれない。人文学におけるe-Science化という何やら怪しげであるが、変貌を遂げつつある電子図書館の行く末は大いに注目されるところである。

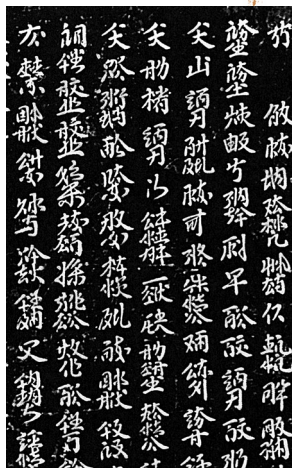
（センター教授）

人文研アーカイブス (15) 道宗皇帝哀冊・蓋（契丹 小字）拓本

遼・乾統元年（1101年）

古松崇志

10世紀初頭、大興安嶺南端一帯の草原地帯より勃興した契丹国（中華風国号は遼）は、開国の祖耶律阿保機が糾合した契丹族の遊牧部族集団を中核とし、精強な騎馬軍団を武器に領域を広げ、12世紀前半に女真（金）に滅ぼされるまで、ユーラシア東方の国際秩序の中心として200年あまり繁栄を誇った。その統治機構には唐の制度を大幅に取り込みながらも、支配者集団が遊牧民としての習俗や自己意識を失うことはなかった。そして、契丹の国家建設の一環として、支配者契丹族の用いる言語を書き表すために契丹大字・小字という二種の文字が創製された。



今回紹介するのは、この契丹小字が刻まれた碑刻拓本である。これは、契丹国第八代皇帝耶律涅隣（1032～1101、漢名：洪基、廟号：道宗）の事跡を刻んだ哀冊で、鳥居龍蔵や京都帝国大学調査隊による調査・研究で名高い契丹皇帝陵の慶陵（聖宗・興宗・道宗の

三つの陵墓からなる）の西陵から発見された。契丹文字碑刻は近年新発見があいついでいるが、その最初の発見として有名である。哀冊は碑身と蓋とを一組とし、契丹小字と漢字の二種が製作され、同時に葬られた宣懿皇后のものをあわせて合計四組の哀冊碑石が多くの副葬品とともに墓室内に安置されていた。哀冊の記述内容については、残念ながらいまだ完全な解読には至っていない。

この哀冊碑石は、1930年ごろ、熱河の軍閥湯玉麟の息子が慶陵の大規模な盗掘をおこなわせたさいに墓室より持ち出され、のちに奉天の私邸に運び込まれた。満洲事変勃発後の1932年3月、関東軍支配下の奉天を訪れた秋貞（田村）實造（のち京都大学教授）が、軍司令部の置かれていた旧湯氏私邸において慶陵三陵の哀冊碑石を再発見し、つづいて新設の満洲国立奉天図書館が副館長の金毓黻を中心に調査・研究を進めて『遼陵石刻集録』を出版、その結果、契丹文字の新発見が世界中の東洋学者たちのあいだに広く知られるようになり、日本や中国では一時契丹文字の研究熱が起こった。その後、満洲国は旧湯邸建物を利用して国立博物館（のち奉天分館）を開館、新造の国家の歴史を構成する重要な部分として契丹は位置づけられて、慶陵哀冊碑石が一般の展覧に供され、とりわけ道宗皇帝と宣懿皇后の契丹小字哀冊は、珍奇な文字資料として、おおいに注目を集めた。奉天博物館所蔵の碑刻拓本は、満洲国における文化事業、とくに歴史・考古の調査・研究事業に参加していた研究機関や研究者の手にも渡った。そうした経緯により、本研究所には内藤湖南旧蔵拓本など複数の慶陵哀冊拓本が所蔵されている。なお、奉天博物館旧蔵碑刻は現在では中国の遼寧省博物館に所蔵され、本碑は公開展示されている。（人文科学研究所助教）

※戦前の慶陵哀冊発見の経緯や慶陵の考古調査・研究の詳細については、拙稿「東モンゴリア遼代契丹遺跡調査の歴史」『遼文化・慶陵一帯調査報告書』京都大学大学院文学研究科、2005年所収を参照されたい。

HP・TOPICS

2003年度より漢字情報研究センターのスタッフを中心として21世紀 COE プログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育拠点」を推進してきた。本年度は5年間の最終年度であるので、本号と次号でその HP (<http://coe21.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>) のコンテンツを紹介したい。

本事業の主要な目的は、(1)東アジアの文字に関する人文情報学的研究、(2)漢字文献ナレッジベースの構築、(3)東アジア人文情報学人材育成の3つである。「成果物」のコーナーには、開催したシンポジウム、セミナーの講演録、講義録が PDF でアップされている。

そのなかで、一押しは「漢字文化の今」というテーマで行った5回のオープン・フォーラムである。漢字文化の今日的課題を広く一般市民と共有することを目指して企画した一般公開のイベントであり、第2回目以降は、京都新聞社と共催で行った。プログラムの副題である「漢字文化の全き継承と発展のために」の趣旨がいったいどのようなものであるのか、人名・地名、漢字教育、マスメディア等における漢字の今日的话题をめぐって多角的な視点から討議しており、講演者の本音トークが随所に垣間見られる。

[DICCS NEWS]

・2007年度の漢籍担当職員講習会は、10月1日(月)～10月5日(金)に初級を実施し、23名の修了者があった。中級は11月5日(月)～11月9日(金)で、17名の参加を予定している。講師陣は、所外からの講師には、初級は高橋智准教授(應義塾大学)を招き、和刻本について講義してもらった。中級は、道坂昭廣准教授(人間・環境学研究科)、濱田麻矢准教授(神戸大学)に集部、現代中国書についてそれぞれ講義してもらう予定である。

・「第4回 TOKYO 漢籍 SEMINAR」を来年3月9日(金)10:30-16:00に学術総合センター2階中会議場にて開催する予定である。今回のテーマは「儒・仏・道の經典観—唐代の宗教と書物」であり、演題と講師は以下の通りである。なお、本セミナーでの講演をまとめた論文集を、京大人文研漢籍セミナーシリーズとして研文出版より刊行することになった。

「玄宗と三教—『孝経』『道徳真経』『金剛般若経』注の撰述をめぐって」

麥谷邦夫(人文科学研究所教授)

「大乘菩薩戒の道—『梵網経』と東アジア仏教」

齋藤智寛(人文科学研究所助教)

「隋唐の学界における孔安国」

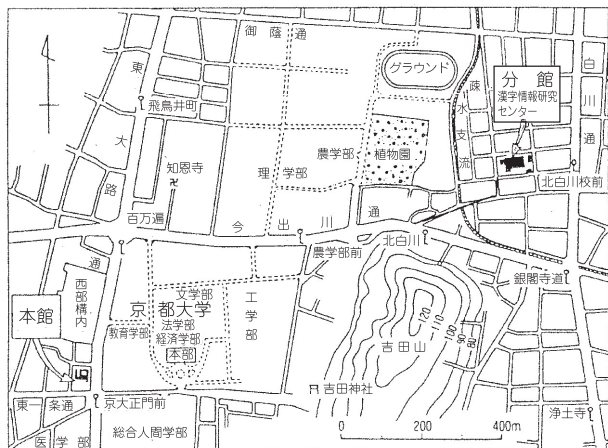
古勝隆一(人文科学研究所准教授)

・最新のセンター刊行物

「東洋学文献類目」2004年度(2007年3月)

『Carl Kreyer: His Life and Library』(東方学資料叢刊第14冊、高田時雄編、2006年3月)

『唐玄宗金剛般若波羅蜜経注索引』(東方学資料叢刊第15冊、麥谷邦夫編、2007年3月)



発行日 2007年10月31日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>